

◇◇◇◇◇
卷頭言
◇◇◇◇◇

距離と高さ

浅野 種正¹

「バリヤフリー」という言葉がある。流行の移り変わりが速く、今ではあまり使われなくなったが、およそ福祉的な意味合いで使われることが多かったと記憶している。流行り始めた頃から、私はこの言葉が大学の教育、研究活動を考えていく上で、ひとつのキーワードのように思っている。大学の個性化が進行し、また社会人向けに大学の門戸がさらに拡がるにつれ、大学側は学外からの授業や研究へのアクセスを受け入れる（あるいは積極的に発信する）ことが日常的に行われるようになるものと考えられる。企業が採用試験時に、「大学時代に何を学び、何ができるのか」を問う時代になったことも、いよいよ大学の教える側、学ぶ側双方の意識の変革が始まったことを示していると言えよう。

「バリヤ」は現実には距離と高さの要素に分けられる。私が勤務する飯塚キャンパスは、人が物理的にアクセスするには大変不便で遠い。学会等の会合を当地でというお申し出に対して、この理由で大方はお断りしているのは私だけではないと想像する。一方、幸いなことに情報通信網の発達で距離の側面でのバリヤは解消できる時代がやってきた。

このような社会的、技術的背景を意識して、マイクロ化総合技術センターにも遠隔授業を実施できるAudio-Visual講義システムを整備していただいている。このセンターは、集積回路に関して設計、試作の独特的な教育を実施していると、センター職員の一人として自負している。施設としての特徴のひとつに、クリーンルームがある。そこにハイビジョンも含めてカメラを設置し、講義室と対話しながら映像を双方向にやりとりできる。このシステムは、電話回線を通じて、飯塚キャンパス内、戸畠キャンパス、学外へ講義を展開できる。戸畠キャンパスの工学部、300人講義室、ならびに地域共同研究センターにも本設備の一部として機器を設置していただいている。そのため、講義だけでなく、例えば各センターで実施するセミナーなどにも相互に利用している。学内外にいつでもアクセスできるよう、専用のデジタル交換機を備えている。また、必要に応じ、インターネット回線で講義等を放映することもできる。大学間遠隔授業を先導しているスペースコラボレーションシステムとも接続することができる。このように、多様な機能をもたせ得るのは、情報科学センターを中心に整備、維持していただいている本学の情報通信インフラストラクチャのおかげであり、ご関係の皆様のご努力に感謝申し上げる。

最近では民間企業においてテレビ会議装置を備えている事業所が急激に増えた。社会人学生などは、職場にいながら指導教官と研究の打ち合わせができる。同様に授業に参加することも可能であろう。民間企業から本システムを利用してセミナーを実施してもらいたいとの要望も少なからずある。

一方で、現状では未だ不十分な点が多い。技術的な問題もあるが、それ以上に制度上の問題がある。これは、バリヤの高さに例えられる。大学間で言えば、例えば単位互換の問題がある。現状の機械は、実際

¹マイクロ化総合技術センター、asano@cms.kyutech.ac.jp

卷頭言

に対面することに比べれば対話の質を維持するのに相当の努力を要求される。そのため、私自身はAVシステムを頼る講義や受講は好むほうではない。しかし、時代の流れと今後の技術的発展を考えれば、この種のシステムに慣れておくことが肝要と思っている。距離と高さの両側面でバリヤフリーとなり、誰でもがいろいろな目的にこの種のものを利用できる日が近いと思っている。